



Title	『平治物語』における常葉：母子救済の様相をめぐって
Author(s)	カナパット, ルーンピロム
Citation	語文. 2013, 100-101, p. 86-99
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70911
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『平治物語』における常葉

—母子救済の様相をめぐって—

ルーンピロム・カナパット

一、先行研究と問題の所在

常葉は、平治の乱で夫源義朝が敗死した後、平家による源氏残党の探索から逃れるために、三人の子供を連れて雪の中を逃亡し、険しい道を歩む。又、彼女の母が平家方に捕えられたことや、子の命を犠牲にして母を助けようと決断することにより、苦悩を抱え込んだ女性として描かれている。こうした常葉の苦悩は『平治物語』のいずれの諸本にも描かれているが、細部を見てゆくと、相違点が見られる。

『平治物語』諸本における常葉譚の違いについては、多く論じられているが、飯塚紀久子氏⁽²⁾の論考によると、古熊本である学習院大学図書館蔵本（以下、「学習院本」）は常葉の心情および母子の悲劇を主に描き出すのに対し、後出本である金刀比羅本は哀れな一人の女性常葉の悲しみを書き出しつつ、横暴な権力者としての清盛を性格づけようとすることが指摘されている。又、観音利

生との結びつきについて、両本とも観音利生を子供の助命の背景として常葉譚の末尾に描いているが、学習院本のみに見られる、老婆に救われる場面における観音利生の贊美に着目すると、学習院本は他の諸本と比べて清水観音の信仰に関わる説話の要素を多く含んでいる。⁽³⁾

以上の先行研究から、学習院本は常葉と子供の悲哀と観音利生の語りを重視していると言える。では、学習院本は母子の悲哀と観音救済をどのように表現し、両者を結びつけているのであろうか。多くの論考が着目する描写は次のような場面である。

(イ) (常葉・執筆者注) 子共が事は何とも成候へ、母の苦を助候はんとて、子共あひぐして参りてこそ候へ」と申ければ、御所を始まいらせて、ありとあるほどの女房達、皆、涙をぞながしける。世の常の女房の心ならば、「老たる母は今日ともしらぬ命なり。後の世をこそとぶらはめ。行末とをき子共をたすけん」と思ふべきに、子を皆うしなふ共、母ひとりを

助んと申心ざしの有難さよ。仏神、定て御憐あらんずらむ

〔学習院本 下「常葉六波羅に参る事」〕(五六頁)

(口) 子共、かくもならざらんさきに、まづ此身をうしなはせ給へと申さんを、などか聞しめされでは候べき。高きも卑も、親の子をおもふ心のやみは、さのみこそ候へ。この子共にわかれ、片時もたえて有べき身共覚え候はず。わらはをうしなわせ給ひて後にこそ、子共をば御はからひ候はめ。

〔学習院本 下「常葉六波羅に参る事」〕(五八頁)

多くの先行研究が注目するのは、(イ) のように、幼い子を失つても老いた母を助けようとする常葉の行動が、二重傍線部「世の常の女房」と対比される場面、あるいは、(ロ) 二重傍線部のように常葉が親の情を語る場面である。

この二つの場面を通じて、たとえば、山下宏明氏⁽⁴⁾は「常盤も幼児をかかる親としてこの母の思いを知つたからこそ〈よのつね〉を越えて自首して出たのである」と述べ、自首を決意した常葉の動機を解釈している。

このように、先行研究は世の常の女性、親の情という他の登場人物の行動に触れ、常葉の行動を解釈している。しかしながら、他の登場人物と常葉の行動を対比する描き方は、前掲の場面のみならず、他の場面にも見受けられ、学習院本常葉譚の特徴と言える。とりわけ学習院本は、母子の悲劇および常葉の心情描写が観音による救済へと展開していく過程において、対比の表現という方法を繰り返し用いている。

以上のような問題意識から、本稿では、学習院本と金刀比羅本における常葉譚の比較を通じて、学習院本における母子の悲哀とその救済の描かれ方を具体的に検討する。特に、学習院本が常葉の悲哀と觀音救済とを結びつける際に対比の表現を利用することに注目して、学習院本常葉譚における独自性を明らかにすることを目指す。

夫の死後における常葉の叙述は以下のようにまとめられる。

〔都落ちの場面〕

① 常葉は平家の戦後処理により自らの子も処分されるという噂を聞き、子供を連れて都を逃れようと決心する。

② 清水寺に参籠し、子の助命を祈願して、清水觀音の利生に対する篤い信仰を語る。地の文には、その深い信心により、觀音が母子の苦悩を哀れみ、救済してくれるだろうと記されている。

③ 逃避行の道中で困難な旅をする。

④ 老婆は、子供を連れて雪の中を彷徨い、悲嘆に暮れる常葉を哀れる。そのため、彼女たちに宿を貸して様々に労わる。

⑤ 老婆に救われたことを觀音の利生として認識し、觀音の利生を賛美する。

⑥ 道中、人々に助けられ、大和に無事に到着する。

〔六波羅出頭の場面〕

⑦ 母が捕えられたことを聞いた常葉は京に戻り、子を犠牲にして母を助けようと決心する。

(8) 周囲の人々は、常葉が子を犠牲にしてまで母を助けようとすることに感心し、神仏も彼女と子供の悲哀に同情するだろ

うと述べている。

(9) 六波羅に出頭する場面で、死罪を覚悟した常葉は自分を子供

より先に斬るようにと清盛に懇願するのに対し、子供はよく

命乞いをするようにと母に言う。

(10) 清盛は常葉と子の言動に心打たれ、処刑の決定を引き延ばす。

(11) 常葉は処刑の延引を觀音の利生として受け取り、觀音の利生

を賛美する。

(12) 常葉の子供は罪を免れる。

具体的には、觀音による救濟への展開と深く関わっている、(2) 清水寺参詣の場面、(4)(5)老婆に救われる場面と、(8)子供を犠牲にして母を助けようとする場面、(9)～(11)清盛と対面する場面を分析の対象として取り上げ、母子の悲哀の語りと觀音救濟との結びつきにおける対比の表現に着目する。

二、母子の悲哀の語り

義朝の死後、子義平が斬られ、三男頼朝が生捕りにされる。常葉は彼女の子も処分されるだろうという噂を聞いた際に、三人の子を連れて都落ちをしようと決心する。常葉と子供は雪の中を逃げ、険しい道を歩む。日が暮れ、宿を探していた時に、老婆に出会つて救われる。夜が更けて常葉は次のように心中を子供に吐露する。

〔学習院本 中「常葉落ちらるる事」二四六頁〕

傍線部のよう、「世にある人」は十人、二十人の子を育てる、後れ先立つことは「うき世の習」でありながら、兄弟とも白髪になるまで生き長らえ、両親の後世を弔うという例を語る。それに続いて、二重傍線部 三人の子供のうち、せめて一人でも最後までそばに居てほしいと懇願して、自らの絶望感を吐露する。又、子供たちはどのように処刑されるだろうと言つて不安感を抱いている姿が描かれている。

周知のとおり、軍記物語における、後れ先立つことはこの世、あるいは、人の「習」であるといった表現は、女性が戦乱で愛する者との離別を覚悟する、それによる悲哀を周囲に慰めてもらう場面によく用いられている。⁽⁵⁾しかし、常葉の場合は、彼女の絶望感・不安感がそれに続いて描写されているように、子供に先立たれることに対する覚悟を示すというより、「世にある人」のよう

に子供が皆生き長らることは期待できない、子供の命に関する苦悩を強調するために利用されている。その意味で、学習院本は「世にある人」、あるいは、「うき世の習」との対比表現を使用し、母としての常葉の悲哀を描写していると言えるだろう。

一方、金刀比羅本は常葉の述懐を次のように描いている。

二人のをさなき人を左右にをき、一人ふところにいだきてく
どきけるは、「あはれ、いとけなきありさまかな。母なれば、
われこそ助けんとおもへども、敵とり出しなば、情をやをく
べき。少もおとなしければ、今若殿はきるか、乙若殿をばさ
しころすか、無下にをさなげれば、牛若殿をば水にいるるか、
士にうづむか、その時われいかにせむ。」と夜もすがらなき
悲みけり。
〔金刀比羅本 下「常葉落ちらるる事」二八三頁〕

金刀比羅本は世の習いに言及せず、傍線部のように、母として子供を助けたいと思いつつも、敵に捕られたら、殺されるだ
らうと不安感を吐露する常葉の姿のみ描いている。

こうして見ると、学習院本は不安感を抱く常葉の心境を描くと同時に、「うき世の習」との対比表現を使用して、他人と異なる母としての悲哀の深さを打ち出そうとしていることが見出される。

前掲の引用文に見られるように、都落ちの場面において、常葉は子供の命を助けてもらいたいという思いを語るが、六波羅出頭の場面においては、拷問された母を助けるために、子供を犠牲にしようと決心する。

常葉、大和にて、此事聞伝えて、「わが子を思ふやうにこそ、

母もわれをばかなしむらめ。我ゆへ苦をうくと聞ながら、いかでかか出で助けざるべき。前世の果報拙て、義朝が子と生れ、父が科の子に懸てうしなはれん事は、其理、有ぬべし。其故もなきわが母の憂き目を見る事は、さながらわが身のとがぞ

かし。此後も子ほしくは、同じゆかりの子を養ても慰ぬべし。無量劫をへてもあらざる親子の中也。責殺されてのちは、悔しもともかひあらじ。母、此世にある時、出て助けん」と思

て、
〔学習院本 下「常葉ハ波羅に参る事」二五五頁〕

常葉は子供への自らの思いを、彼女のことを思い悩む母の気持ちと照らし合わせて、母を助けようと決心する。又、傍線部のように、子供が殺されることを、前世の果報や夫の罪の結果として受け止めている。

子供の助命を求めていない常葉の姿は、清盛と対面する場面においても語られている。

〔左馬頭、罪ふかき身にて、其子共、皆うしなはれんを、一
人をも助させ給へと申さばこそ、其理しらぬ身にても候はめ。
子共、かくもならざらんさきに、まづ此身をうしなはせ給へ
と申さんを、などか聞しめされでは候べき。高きも卑も、親の子をおもふ心のやみは、さのみこそ候へ。この子共にわかれ
て、片時もたえて有べき身共覚え候はず。わらはをうしな
わせ給ひて後にこそ、子共をば御はからひ候はめ。此心ざし
を申さんためにこそ、左馬頭が草の陰に恥を見せて、かゝる
憂形勢を思ひもしらず、これまで参て候へ。(後略)〕と、な

くくくくどき申せば、

〔学習院本 下「常葉六波羅に参る事」一五八頁〕

傍線部のように、常葉は清盛と対面した際にも、夫の罪を覚悟し、子供の助命を期待していないと繰り返し訴える。ここで注目すべきは、子供の処刑に対する覚悟に続く、母としての常葉の思ひの描写である。常葉は子供が殺される前に、自分を先に斬るよううにと清盛に懇願する。それに続いて、二重傍線部のよう、身分の上下を問わず、おしなべて皆、子供のことを思い悩むという親の情を語り、子供を失うことによる悲嘆を吐露する。このように、学習院本は子供の処刑に対する覚悟を語り、それに続いて、親の情を通じて、子供に対する愛情を描写したことによって、子供の処刑に対する覚悟と子供に対する愛情との葛藤が見出される。

一方、金刀比羅本は常葉が母を助けようと決心する際に、前世の果報、あるいは夫の罪に対する覚悟を描かず、郭巨の故事を、母の命を助けるきっかけとして語っている。

大和にて常葉此由つたへき、「昔の郭巨は、母の命をたすけん為に、子どもをうづむとて穴をほりしかば、金の釜をほりいだし、母も子どもをも助るとぞうけ給はる。命あらば母をみるべし。少き者どもにはいかでか思ひかへ候べき。」とて、おさなき人々を引具して六波羅へいでのが、(後略)。

〔金刀比羅本 下「常葉六波羅に参る事」二八五・二八六頁〕

傍線部のように、貧しい郭巨は母の命を助けるために、子供を埋めて殺そうとしたが、穴を掘ったところ、金の釜を見付け、母

も子供も助かつたという故事が引用されている。

常葉に對面して、「この間いづくにありけるぞ。」と宣へば、常葉、「義朝の少ひ人々の候を、取いだされうしなはるべしと承り、かたはらにしのびて候つれども、とがもなき母の命を失なはるべしとうけ給候程に、たすけむ為に参りて候。をしさなきものどもうしなひ給はゞ、まづわらはうしなはせ給へ。」とてなきむたり。

〔金刀比羅本 下「常葉六波羅に参る事」二八五・二八六頁〕
清盛と対面する場面においても、夫の罪に対する覚悟や親の情に言及せず、傍線部「をさなきものどもうしなひ給はゞ、まづわらはうしなはせ給へ」という常葉の願いのみ描いている。

以上のように、両本とも母の命を助けたいという常葉の思いと、自分を子供より先に殺してほしいという願いを語っている。しかしながら、子供が殺されることに関する常葉の心情描写には相違点が見られる。学習院本は一般的な親の情との対比表現を通じて、子供の処刑に対する覚悟と子供に対する愛情との葛藤を示しているのにに対し、金刀比羅本はそのような揺れ動いた心情に着目せず、子供を失うことによる悲哀のみ描き出している。

常葉の心情描写の他に、子供の描かれ方にも両本の違いが見受けられる。

六子、母の顔をたのもしげに見あげて、「なかで、よくく申てたべや」と云ければ、只今までも、よに心強気におはしける大式殿(執筆者注・清盛)も、「けなげなる子が詞かな」

とて、傍にうち向て、累に涙をながされけり。兵ども、あまた並居たりけるに、涙にむせびてうつぶさまになり、面を上たる者もなし。

〔学習院本 下「常葉六波羅に参る事」二五八頁〕

常葉の言葉に統いて、次男六子は傍線部のように、泣かずによく命乞いをするようにと母に言っている。常葉と子供の言葉に対し、二重傍線部のように、心強い清盛でも六子の健気さに感心し、涙を流す。「けなげなる子」と清盛が褒めたことについて、日下力氏と飯塚氏の論考では、しつかりとした態度ではなく、状況を飲み込めていない六歳の子の無邪気さを暗示していると指摘されている。⁽⁶⁾

今若殿、敵清盛のかたへ一日、常葉が方を一めみて、「泣て物を申せばぜひも聞えぬに、なかで申させ給はで。」と宣へは、平家の人々侍共、「義朝の子なれば、少けれども申つることのおそろしさよ。」とてしたをふりておぢあへり。

〔金刀比羅本 下「常葉六波羅に参る事」二八六頁〕

一方、金刀比羅本では、次男ではなく長男が「泣て物を申せばぜひも聞えぬに、なかで申させ給はで。」と母を叱つたとなつてゐる。傍線部のように、周囲の人々は学習院本のように、同情するのではなく、その言動を恐ろしがつてゐる。

以上のように、学習院本は一般的な親の情との対比表現を利用して、子供が処刑されることを恐れる常葉の心情を詳細に描いてゐる。又、子供の無邪気さを、清盛、周囲の人々の同情を搔き立

てるものとして設定している。学習院本はこのように常葉の心の葛藤、子供の無邪気さを描いたことによつて、子供を失うことによる母の悲哀のみならず、敗将の妻子の悲劇も浮かび上がらせるのである。

三、観音救済との結びつき

以上見てきたように、学習院本は「うき世の習」や「親の子をおもふ心」のような表現を利用して、他人より深い悲しみを抱え込む母子の姿を描き出し、悲劇性をいつそう増してゐる。では、母子の悲哀を観音利生とどのように結びつけて救済へと展開していくのだろうか。ここで、清水觀音に祈願する場面、老婆に救われる場面、母を助けようと決心する場面という三つの場面に着目する。

〔清水觀音に祈願する場面〕

常葉は子供を連れて都落ちをする前に、清水寺に通夜して次のようになに祈願する。

九のとしより月詣を始て、十五に成しかば十八日毎に觀音経三十三巻よみ奉る事、おこたらす。歩をはこぶ志の浅からざれば、本尊もいかでがあはれと照させ給はざるべき。「大慈悲の本誓には、定業の者をも助け、朽たる草木も花さき、実なるとこそ承れ。南無千手千眼觀世音菩薩、三人の子共すけましませ」と、終夜泣くとき祈り申せば、觀音もいか

に憐給ふらんとぞ覚えし。

〔学習院本 中〕「常葉落ちらるる事」二四〇・一〔四一頁〕
右のように、常葉は觀音の慈悲と子供の無事への祈願を語つて
いる。祈願の冒頭に「九のとしより月詣を始て、十五に成しかば
十八日毎に觀音經三十三卷よみ奉る事、おこたらず」とあるよう
に、日ごろからの深い信仰が示されている。さらに、波線部に見
られるように、觀音は母子の苦惱を哀れみ、救濟してくれるだろ
うと、作者によつて予告されている。

金刀比羅本においても、觀音に帰依する常葉の姿は次のように
詳しく述べられている。

佛の御前にて申けるは、「わらは、觀音にたのみをかけまい
らせ、七歳のとしより月ままでおこたらず。十三のとしより
月ごとに一部の法華經をこたらす、十九の歳より月ごとに三
十三礼の聖容をすりたてまつる。その觀音の慈悲利生ふかく
おはしますことをうけたまはるに、三十三身の春の花、にほ
ふたもとは数をしらず、十九數の秋の月、もりこぬ宿はよも
あらじ。觀音の慈悲利生なれば、後世までと申とも、何にか
なへさせたまはざるべき。いかにいはんや、今生に三人の子
共の命を助てわらはにみせさせ給へ。」と通夜くどき申され
ければ、參籠の上下みな下向す。

〔金刀比羅本 下〕「常葉落ちらるる事」一八〇頁)
右のように、常葉の長年の觀音信仰、觀音の慈悲、子供の助命

への祈願が語られている。さらに、觀音によつて母子が救済され
ることも波線部のようによつて予告されている。

ここで注目したいのは、学習院本が常葉の祈願の前に、彼女と
同様に通夜して祈る周囲の人達の姿に言及していることである。
其夜は、觀音の御前に通夜す。二人を左右のかたはらに伏せ
て、おさなきをふところに抱きて、夜もすがら泣かせじとこ
しらへける、心の中にいふはかりなし。所の参詣の貴賤、肩
をならべ、膝をかさねて並居たり。祈誓の趣、まち／＼なり。

或は、ありはてぬ世中なれ共、過がたき身のありさまをいの
るもあり。或は、世につかへながら、司位の心にかなはぬ事
をいのるもあり。されども常葉は、「三人の子共が命、たす
けさせ給へ」と、いのるより外、又心にかけて申事なし。

〔学習院本 中〕「常葉落ちらるる事」二四〇頁)
傍線部のよう、周囲の人たちは平穏な生活や繁榮を祈願して
いる。それに対し、常葉は他人の願いと異なつて、二重傍線部、
子供の無事を祈るより他はないとあるように、子供に関する常葉
の深い苦惱が表現されている。金刀比羅本は前掲のように、常葉
の信仰と祈願を中心にしており、母子の悲哀を特に描いてい
ない。

以上のように、両本も清水寺参詣の場面で、常葉の觀音信仰を
明示し、母子が觀音利生により救われる事を予告している。
よつて、両本においても常葉の長年の深い信仰は、救済をもたら
す要因として重視されていることが窺える。ところが、学習院本

は金刀比羅本に見られない、俗事を祈る周囲の人たちの願いを先に挙げ、子供の命を考えることしかできない常葉と対比して、敗将の妻子の憂き身を浮彫りにしている。このように、学習院本は積極的に対比表現を利用しただけに、清水寺参詣の場面において、常葉の深い信仰の他に、悲哀に満ちた心境も打ち出され、母子の苦悩は観音救済と結びつけられることがより明確に見出される。

『老婆に救われる場面』

都落ちの場面において、険しい道を経た常葉は老婆に出会つて救われる。彼女は老婆に出会いた際に、事実を言わずに夫の薄情を恨んで逃げ出したと嘘をつく。常葉の隠しごとを見抜いた老婆は次のように言つている。

さればこそあやしかりつるが、いかさまにも、たゞ人にてはおはしまさじ。かゝる乱れの世なれば、しかるべき人の北の方にてぞおはすらめ。行衛もしらぬ君の御ゆへに、老衰たる下臍が六波羅へ召出されて、繩をもつき恥をもみて、命をうしなふほどの目にあふとても、追出し奉るべきかは。此里のならひ、誰かうけ取まいらせん。野山にこそおはしまさんずらめ。是ほどさむく絶がたきに、明日までも、いかでかながらへさせ給べき。

〔学習院本 中「常葉落ちらるる事」一四五頁〕

老婆は、傍線部のよう、常葉と子供のようこの先どうなるか分からぬ人を匿つたために、自分が平家方に捕えられ、命を

失うほどの目に遭うだろうと自覚しているものの、常葉と子供を助けようと決意している。

ここで注目すべきは、老婆が常葉と子供を救う際に、二重傍線部「此里のならひ」に言及していることである。日下氏は「此里のならひ」を、「都近く損得にざといこの里のこと、世話する人などおりません」と解釈している。日下氏の解釈を踏まえると、学習院本は老婆が自らの命の危険を覚悟したものと常葉と子供を助けることを、「此里のならひ」と異なる行動と示し、老婆の温情を強調しようとすることが窺われる。

それに對し、金刀比羅本は彼らを困難な旅から救つた人の言動を次のように描いている。

ある小屋に立よりて、「宿申さむ。」といへば、主のおとこ見てみて、「たゞいま夜深て少人を引具してまよひ給ふは、謀叛の人の妻子にてそましますらん。かなふまし。」とておとこうちへ入にけり。落涙もふる雪も、さうのたもとに所せく、柴のあみ戸にかほをあて、しほりかねてぞ立たりける。主の女房出てみてひけるは、「われらかひぐしき身ならねば、謀叛の人に同意したりとて、とがめなんどはよもあらじ。たかきもいやしきも女はひとつ身なり。いらせ給へ。」とて、常葉をうちへ入て、さま／＼にもてなしければ、人ごゝちになりにけり。

〔金刀比羅本 下「常葉落ちらるる事」二八二—二八三頁〕

常葉の姿を見た主の男が「謀叛の人の妻子にてそましますらん」を理由にして常葉の依頼を断る姿を描いている。又、主の女房が宿に泊める際に、傍線部のように身分や女の身という理由のみ挙げている。

学習院本は金刀比羅本に見られない「此里のならひ」との対比表現を通じて、老婆の温情を詳細に描写し、さらに、老婆の言動を次のように観音の利生と結びつけている。

(老婆・執筆者注)いそぎよび入、あたらしき筵取出出してしかせ、たき火してあて、饗応してぞす、めける。常葉は、胸ふさがりてすこしも見ず。子共をば、とかくすかして食わせけり。常葉が物くはぬを、あるじ心苦く思ひ、色々のくだものもしくぞ思ひける。

〔学習院本 中「常葉落ちらるる事」二四五・二四六頁〕

老婆は常葉と子供を宿に泊めて様々に労わる。波線部のように、常葉は老婆の行為を「清水の観音の御あはれ」として受け取っている。

こうして見ると、学習院本は対比の表現を通じて、老婆が自らの命を顧みず母子を救つたことを「此里のならひ」と異なる行動と示し、老婆の温情の深さを強調した上で、観音利生と結びつけようとしている。

『母を助けようと決心する場面』

常葉は困難な旅を経て、一旦、大和に隠れる。しかし、その後、母が拷問されたことを聞き、母を助けるために六波羅に出頭しようと決心する。ここで、子供を犠牲にしようと決心する際の述懐に注目したい。常葉は「前世の果報拙て、義朝が子と生れ、父が科の子に懸てうしなはれん事は、其理、有ぬべし」と言つて、子供の処刑を、前世の果報や夫の罪の結果として受け止めている。それに続いて、

此後も子ほしくは、同じゆかりの子を養ても慰ぬべし。無量劫をへてもあらざる親子の中也。責殺されてのちは、悔しむともかひあらじ。母、此世にある時、出て助けん」と思て、

〔学習院本 下「常葉六波羅に参る事」二五五頁〕

とあるよう、子供がほしければ、亡き夫の血縁につながる子を養うことができるが、母を殺されたならば、悔しいと思つても甲斐がないと思い、母を助けようと決心する。

子供の命と引き換えに母の助命をしたいという思いは、六波羅に出現する前に、常葉が昔仕えていた九条院藤原皇子(以下、「九条女院」と、清盛の側近伊勢守景綱と対面する際にも語られている。ここで注目すべきは常葉の思いを聞いた九条女院、女房達、および景綱の反応である。

九条女院と対面する場面において、常葉は「子共が事は何とも成候へ、母の苦を助候はん」とあるように、子供を犠牲にして母を助けようとするという思いを語る。

「世の常の女房の心ならば、「老たる母は今日ともしらぬ命なり。後の世をこそとぶらはめ。行末とをき子共をたすけん」と思ふべきに、子を皆うしなふ共、母ひとりを助んと申心ざしの有難さよ。仏神、定て御憐あらんずらむ。(後略)」とめんくに申されければ、

〔学習院本 下「常葉六波羅に参る事」一二五六頁〕

それに対し、女房たちは傍線部「世の常の女性ならば、老いた母は今日でも生き長らえるかどうか知らないので、母が亡くなつたら後世を弔えればいい、将来がある子供の命こそ助けようと思うものだ」という世の常の女性の考え方方に言及している。そして、世の常の女性と違つて、幼い子を失つても老いた母を助けようとする彼女の親孝行を称賛して、波線部「仏神、定て御憐あらんずらむ」と述べている。このような女房の言葉について、山下宏明氏と小畠達氏は常葉の親孝行が神仏による救済に繋がつたと解釈している。⁽⁸⁾

〔執筆者注〕子共こそうしなひ候はめ、母をばいかでか助けでは候べきと思ひ定めて、御尋ある子ども、相具して参て候うへは、母をばゆるさせ給へ」と泣き申ければ、きく人、孝行の心ざしを感じて、みなく泪をぞながしける。

〔学習院本 下「常葉六波羅に参る事」一二五七頁〕

景綱と対面する場面においても、景綱らは傍線部、常葉の「孝行の心ざし」に感心することが描かれている。このように、子供を犠牲にしてまでも、親孝行を果たそうとす

る常葉の思いは、世の常の女性の行動と異なり、周囲の人たちの心を動かすものとされている。又、母子が神仏の慈悲により救われるだろうという予告が、この場面と前掲、常葉が子供の無事を祈願する場面とに描かれていることから見ると、山下・小畠両氏が指摘するように、学習院本では母子の苦悩の他に、常葉の親孝行も神仏の救済をもたらす一因と見做される。

女房たちが言及した、老いた親より子供を助けるという世の常の女性の考え方は『今昔物語集』卷十九、第二七「住河辺僧、値洪水棄子助母語」にも見受けられる。

淀川の辺に住む僧は氾濫により子供を流される。僧は子供を助けて岸に戻ろうとする際に、目の前で老いた母が流されていく。僧は子供と母を同時に助けることはできず、「命有ラバ子ヲバ亦モ儲テム。母ニハ只今別レテハ亦可值キ様無シ」と思い、子供の手を離して母を助ける。僧の妻は子供が流されていつたことを歎き、「汝ハ奇異キ態シツル者カナ。目ハ二ツ有リ。只独リ有テ白玉ト思ツル我ガ子ヲ殺シテ、朽木ノ様ナル嫗ノ今日明日可死ヲバ何ニ思ヒテ取り上ゲツルゾ」と夫を責める。最終的に、「母ヲタル事ヲ仏哀トヤ思食ケム、其子ヲモ末二人取り上ゲタリケレバ」とあるように、子供が助けられたのは仏が僧の親孝行を感心したからだと語つて話を締め括つている。

最愛の一人子を捨て、今日明日、死ぬだろう、「朽木ノ様ナル」老いた母を助けた僧を、「奇異キ態シツル者」と責めた妻の言葉から、いざという時に、老いた母より子供を助けることは常識的

な行動だと考えられる。さらに、妻の悲しみを慰めようとする僧

は「現ニ云フ事理ナレドモ、明日死ナムズト云トモ、何デカ母ヲバ子ニハ替ヘム。命有ラバ子ハ亦モ儲テム。」と言つてゐる箇所にも見られるように、子供はまた儲けられるが母の代わりはないことを訴えながらも、妻が言つた事を「理」と認めてゐる。このことから、僧の妻の考え方は世間での一般的な判断であることが確認できる。このように、僧は「世の常」の人々と異なる判断をすることが明示されているが、話の結末に「母ヲ助タル事ヲ仏哀トヤ思食ケム、其子ヲモ末二人取り上ゲタリケレバ」とあるように、親孝行を果そうとする僧の行為こそ子供に救済をもたらす要因となつてゐる。

僧の話を常葉譚と合わせて見ると、子供を犠牲にしてまでも親孝行を果たすという彼らの行為を「世の常」の人々の判断と異なる特異なものとして示した上で、親孝行を救済と関連付けようとする物語の姿勢が窺われる。

一方、金刀比羅本においても親孝行を果たす常葉の姿が描かれているものの、九条女院の反応には相違がある。

おさなき人々を引具して六波羅へいでのけるが、九条の女院にいとま申にまいりたり。女院御覽じて、「何に、此ほどは何事ありつるぞ。」とおほせくだされければ、「子共の命助けん為に、大和なる所にしのびてさぶらひつれ共、とがもなき母のいのちを失なはるべしとうけ給て、助けん為に六波羅へいさぶらふが、いとま申に参りてさぶらふ。」と申せば、女

院あはれにおぼしめし、最後の出立自せんとて、

〔金刀比羅本 下「常葉六波羅に参る事」二八四・二八五頁〕

右のように常葉の苦惱に同情する九条女院の姿が描き出されてゐる。しかし、学習院本のように常葉の親孝行を「世の常の女房の心」と対比して称賛することと、観音救済の予告は記されていない。

このように両本における親孝行の叙述を比べると、学習院本は「世の常の女房の心」と対比させつつ常葉の「孝行の心ざし」を強く印象づけ、観音救済へつなげようとすることが明確になる。

以上見てきたように、学習院本は母子救済へと展開するにあたって、俗事を願う人たちの姿「此里のならひ」、「世の常の女房の心」といった世間での一般的な行動を取り上げ、それと異なる、母子の苦悩の深刻さ、老婆の温情、常葉の親孝行を打ち出している。こうした対比表現で常葉の悲哀や性質を浮かび上がらせ、その上に救済を予告する形で母子救済へと展開していくことは、金刀比羅本ではなく、学習院本の特徴と見做すことができる。

最終的に、頼朝が死罪を免れ、流罪に処せられることが決まりたことにより、常葉の子供は罪を赦されることとなつた。常葉の子供が助命された場面において、次のように観音利生を賛美して章段を締め括つてゐる。

常葉、「一日片時も、命のあるこそぶしげなれ。これさながら、清水の觀音の御助なり」とたのもしくて、わが身は觀音經をよみ、子共には觀音の御名をおしへて唱へさせけり。

〔学習院本 下「常葉六波羅に参る事」二六〇頁〕

波線部のよう、常葉は子供の処刑が延引されたことを「清水

の觀音の御助」と思い、自身が觀音經を読んで子供に觀音の名を

唱えさせている。ここに、常葉は子供が生き長らえたことを、清

水觀音の利生と受け取っていることが明確に表されている。

多くの先行研究で指摘されたように、『平治物語』のいずれの諸本も、常葉譚の末尾で常葉と子供の助命を觀音救濟と結びつけている。ただし、金刀比羅本は觀音利生の他に、常葉の美貌を助命の一因として設定している。

三人の子どもの命をたすけしは、清水寺の觀音の御利生といふ。

日本一の美人たりし故也。容は幸の花とはかやうのこと

をや申べき。

〔金刀比羅本 下「常葉六波羅に参る事」二八七頁〕

金刀比羅本においては、波線部のよう、觀音利生は常葉の言葉ではなく、地の文として記されている。さらに、觀音利生のみならず、常葉の美貌も二重傍線部のように助命の一因となる。常葉の美貌は次のように語られている。

常葉生年二十三、九条女院の后たちの御時、都の中よりみめよき女を千人そろへて、そのなかより百人、又百人が中より十人すぐりいださされる。其中にも常葉一とぞきこえける。千人が中の一なれば、さこそはうつくしかりけめ。異国に聞えし李夫人・楊貴妃、我朝には小野小町・和泉式部もこれにはすぎしとぞみえし。貴妃がすがたをみな人は、百の媚をな

すといへり。大宰大貳は、常葉が姿をみ給ふより、よしなき心をぞうつされける。

〔金刀比羅本 下「常葉六波羅に参る事」二八六頁〕

右のよう、金刀比羅本は美しい女性千人の中から選ばれたという常葉の美貌を語っており、傍線部では清盛が常葉の美しさに惹かれることが描かれている。

学習院本では、常葉の美貌は助命の一因ではないが、金刀比羅本と同様に美貌の評判が描かれている。ここで注目すべきは、学習院本が常葉の美貌だけでなく、痩せ衰えた姿も描き出していることである。

常葉がとし、廿三なりき。中宮の官女にて物なれたるうへ、思ひ胸にあれば、こと葉、口に出て、たけき武士もあはれと思ばかりに申づけて、青黛、ふかき涙に乱れ、歎日数を経て、其人ともなくやせおとろへたれども、なを世のつねに越たり。見る人、これをあはれまといふ事なし。「これほどの美女をば、目にも見ず、耳にも聞およばず」と申あひければ、ある人、申けるは、「よきこそ、ことはりなれ。大宮左大臣伊通公の、中宮御所へ、見目よからん女をまいらせんとて、よしときこゆる程の女を、九重より千人召れて百人えらび、百人より十人えらび、十人がうちの一にて、此常葉をまいらせられたりしかば、わろかるべきやうなし。さればにや、見れどもく、めづらかなるかほばせなり。唐楊貴妃・漢李夫人が、一度咲ば百の媚をなしけんも、これには過じ」と、

たはぶれ申人もあり。

〔学習院本 下「常葉六波羅に参る事」（五九頁）〕二重傍線部のよう、常葉は「其人ともなく」瘦せ衰えたが、美しさが「なを世のつねに越たり」と評され、そのような彼女の有様を見た周囲の人々は同情・感動したとある。

もちろん、このような常葉の有様の描き方は単なる登場人物の美しさを描写する典型的な表現方法である。しかしながら、常葉の悲哀や親孝行の描写と同様に、同情心を引き起こすものとして機能していると考えられる。こうして見ると、両本とも観音救済を語るとはいえども、助命への展開には大きな相違点が見出される。学習院本は前の場面に呼応する、人々の同情心といった要素を軸とするのに対し、金刀比羅本は清盛が常葉の美貌に心を奪われたことを付加し、美貌を観音利生とともに助命の要因として位置付けることで、人々の同情心の要素が後退していくのである。

四、おわりに

以上、学習院本と金刀比羅本との比較を通して、学習院本における母子の悲哀および観音救済の描き方を考察し、対比の表現に注目した。常葉譚の描かれ方について、今までの多くの先行研究では、『平治物語』諸本の本文異同により、母子の悲哀と観音救済を重視する学習院本の姿勢が指摘されてきたが、描き方の点から考慮すると、対比の表現は学習院本の常葉譚における一つの表現形式として、母子の受難から観音救済へと展開する過程と深く

関わっていることが窺われる。学習院本は金刀比羅本のように單に母子の苦難を語るのではなく、対比の表現を利用して、常葉の心境、他人とは異なる追い込まれた深刻な状況を詳細に描き出した上で、敗将の妻子の悲劇性を浮彫りにしている。又、母子の受難から観音救済へと展開する際にも、対比表現を通じて、老婆の温情、特に、常葉の親孝行を、世間での一般的な行動と異なる特異なものとして示した上で、観音救済につなげている。このように、学習院本が対比の表現方法を利用して、敗将の妻子の悲劇性や常葉の性質を、人と神の同情心を引き起こすものとして打ち出し、観音利生による母子救済という構想を提示することに、学習院本常葉譚の表現形式における独自性が見出されるだろう。

注

(1) 岡部真由美「『平治物語』における常盤像の生成」（広島女学院大学 国語国文学誌）三 一九七三年十二月）、長沢レイ子「『平治物語』における常葉説話の考察」（千葉大学人文学部 文論叢）三 一九七五年五月）、小畠達「平清盛と常葉」（国文学 解析と鑑賞）七一 二〇〇六年十二月）

(2) 飯塚紀久子「『平治物語』における常葉説話の変遷」（成蹊国文）十三 一九七九年十二月）

(3) 物語全体を通じて、常葉譚に語られる観音利生は、源氏再興話、あるいは、源家後日譚の義経物語とどのようにつながっているかという問題点について、山下宏明「『平治物語』の読み—常盤の物語をめぐって—」（文学）五一・四 一九八四年四月）は、「この観音が常盤母子の行く先を拓き、源氏の再興をつむぎ出し

て行くのである」と述べ、常葉譚に語られる觀音利生と源氏再興話との関連性を指摘している。それに対し、安藤淑江「平治物語「源家後日譚」考—常葉譚の繼承と賴朝報恩報復譚をめぐって—」(『軍記物語の生成と表現』研究叢書一九九五年)は、「源家後日譚」中の義経の物語には、靈験譚的側面は全く見られない。このことからも、「源家後日譚」の義経の物語が、常葉の物語を継承しつつも異質なものであることがわかる。」と述べ、源氏再興話は常葉譚における觀音利生の語りと直接関わっておらず、常葉譚の延長として語られると指摘している。本稿は、安藤氏の見解に基づいて、常葉譚における觀音利生の語りを源氏再興話とは分けて考えることとする。

(4) 山下宏明(前掲注)(3)著書

(5) 後れ先立つことがこの世、あるいは、人の「習」であるといった表現は、登場人物が愛する者を「くして悲嘆に浸る場面によく見受けられる。例えば、『保元物語』において、為義の北の方が夫、子供たちを斬首されたことを歎いて入水しようとする際に、周囲の人達は、

御歎事ハ中／＼申不／＼及。昔モ今モ加様事ハ候。親ニ後レ子ニ後レ、妻、夫ニ別ル、事、人毎ノ習也。

〔『保元物語』下「為義ノ北ノ方身ヲ投ヶ給フ事」一四〇頁〕と言つて、夫婦、親子がどちらかに先立たれることは「人毎ノ習」である、と彼女の悲哀を慰めている。

(6) 飯塚紀久子(前掲注)(2)著書)と、日下力「常葉譚の撰取」

(『平治物語の成立と展開』汲古書院一九九七年、初出一九八三年)は、清盛が六子を「けなげなる子」と褒めたことに、状況を飲み込めていない六子の無邪気が暗示されていると指摘している。日下氏の論考によると、次のようになる。

常葉は、もとより、子供の命乞いをしているのではなかつた。

それを「六子」は理解できていなかつたのである。泣訴する彼女の姿に悲壮な強さがにじみ出ていたとしても、現実的には「たのもしげ」であるはずはなかつた。母と子の間にあるギヤップが、清盛をはじめとする武士達の涙をさそう。清盛は、「けなげなる子が詞かな」という言葉を洩らしたというが、それは、事態をのみこめぬままに口を差しはさむ、さかしらな子供のいじらしさに対して発せられたものであつたろう。

(7) 日下力『平治物語』(岩波書店一九九一年)

(8) 山下宏明(前掲注)(3)著書)は、「この「よのつね」を越えて、親子の情、常盤の自首が清水觀音を動かしたのである」と述べている。小畠達「『平治物語』における常葉御前の女性性」(『国文学 解釈と鑑賞』七十二〇〇五年三月)は、「母である自己を抑制して、あるいは犠牲にしての行為(孝養)であった点が觀音の救済に繋がった」と指摘している。

使用テキスト

・新日本古典文学大系『保元物語・平治物語・承久記』(岩波書店一九九二年)

・日本古典文学大系『保元物語・平治物語』(岩波書店一九六一年)

・新日本古典文学大系『今昔物語集 四』(岩波書店一九九四年)

※引用に際し、一部の漢字を該当する常用漢字に改めた。

(Ruenpirom Kanapati シラバコーン大学非常勤講師)